

伊福部 達さん

工学博士

真に残る技術とは何か

障害を持つ人が社会で活躍する。それを工学的立場から支援する。それが福祉工学という研究分野だ。福祉工学の思考から開発された技術は、障害者だけでなく、多くの人が享受できる。なぜ、そうなるのか？ 人の潜在能力を活かすモノづくりとは？ 伊福部達さんに聞いた。

「緊急地震速報」の音作り

伊福部さんは福祉工学の立場から、NHKの緊急地震速報のチャイム音を作成されていますね。

二〇〇六年頃に依頼されたのですが、高齢社会になつてバリアフリーがいろいろあるところで言われていたんです。誰にでもわかりやすく聴こえ、その音がある行動を促す、そういう音が求められた。福祉工学はそういったことを研究する分野ですから、私に話があったらと思う。しかし緊急地震速報は命にか

かわる重要なものですから、安易な気持ちで引き受けるわけにはいきませんでした。さらに瞬時に、身を守る行動を強く促す音でなければなりません。そこでNHKには五つの条件を承諾してもらいました。

- ① 緊急性を感じさせる
 - ② 不快感や不安感を与えない
 - ③ 騒音下でも聴き取りやすい
 - ④ 難聴者でも聴き取りやすい
 - ⑤ どこかで聴いた音と似ていない
- これが私の条件でした。

音の「ユニバーサルデザイン」ですね。緊急地震

速報を作成するにあたって、叔父である作曲家・伊福部昭（一九一四～二〇〇六）のゴジラのテーマ曲を参考にしたということ？

誰もがあの曲を聴くと「ゴジラが来る」と思えますよね。そういう意味で緊急地震速報も、その音を聴けばみんな「地震が来る」と感じられるものにしなけれ

ばという思いはありました。けれどもゴジラの曲はあまりにも有名で、少しでも似せるとゴジラしか思い浮かばない。それでは駄目なんです。「ゴジラの曲が流れている」としか思わないでしょうから（笑）。

いま、いたるところで音は氾濫しています。たとえば、携帯の呼び出し音、冷蔵庫を開けっ放しにしたりとピーと鳴る警告音、炊飯器もご飯が炊けるとピピピと鳴るし、ドアホンのピンポンなどもそうです。その音自体には意味がありませんが、何かを知らせる音はたくさんある。でも、緊急地震速報は、それらのどの音とも似ていてはいけません。音の素材もピアノやバイオリンなど特定の楽器の音であってはいけないし、世の中に氾濫しているいわゆる電子音でもいけない。これまでにない音にしなればならなかった。しかも短期間で完成させなくてはなりません。したがって、著作権の問題も大きなネックになりました。

—— 独創的で、強いメッセージが込められている。そういう音作りですね。

そうですね。メッセージ性がある音として参考になるのは映画音楽です。映画音楽には、「空間・時間軸を知らせる」「感情の状況を知らせる」「場面の変化を予



●いふくべ・とおる 1946年北海道生まれ。東京大学・高齢社会総合研究機構特任研究員。工学博士。日本における福祉工学分野の第一人者。専門は生体工学、音響工学、情報工学。『福祉工学の挑戦』『福祉工学への招待』など著書多数。東京大学名誉教授・北海道大学名誉教授。